

私にも 言わせて! 第55回

和華蘭のまち長崎で 温故知新の保健衛生

執筆機会をいただき、感謝申し上げます。臨床およそ20年、行政7年目、
年齢50にしていまだ新しい経験の連続で、身の引き締まる毎日です。現
任地長崎市のご紹介と、入庁からこれまでを記してみました。

はじめに

本村克明と申します。昭和41年九州は佐賀市に生を受け、平成3年に長崎で医師となりました。臨床では主に小児内分沁領域を学び、19年の新型インフルエンザ流行時に保健行政との縁が深まり、先任の諸先生方のお導きを得て、22年に行政医に転じました。

入庁を考え始めたのは、新臨床研修制度導入とも重なり、長崎大学の医局人事にも苦勞が多かったのですが、幸い入局者数も安定し始めて、優れた後輩たちが専門外来を引き受けてくれたことから、教授のご了解をいただいて、卒後20年をめぐりに入職しました。亡父も長崎で博士号をいただき、

ろうとした先人の足跡がいまも残されています。たとえば、下水路を板石、瓦材、漆喰等で三面張りし護岸し整備された溝より大きく川より小さい「えい・えいばた」は、生活用水である井戸水への汚水の混入防止と火災の延焼防止を兼ねた排水施設で、中心市街のそここに残っています。思案橋からほど近い中通りと寺町筋の間にも、1886年にコレラ等の感染症対策を目的として改良整備された、「ししとき川」と呼ばれる幅2mほどの三角溝遺構を見ることが出来ます。19世紀は国際化進展とともに世界中でコレラのパンデミックが見られ、一たび流行し始めると数万人単位の死者が出た時代でした。長崎市衛生史にも、1885年コレラ流行により617名が死亡、翌年も417名が落命した記録が見えます。コッホによるコレラ菌発見はようやく1884年、効果的な対策等は当時いまだ研究途上で、手探りで対策せざるを得ない状況だったと思われま。駆逐すべき敵の正体さえわからない中で、早急に対策を打たざるを得なかった往時の苦勞をしの

長く佐賀で保健所長をしておりましたので、保健行政で働く医師像は幼時からごく身近なものでした。いまも古い資料の渉猟時に、父の過去の仕事を目にするたび、懐かしくうれしく感じています。

長崎の入り

長崎市は県南端に位置し、南西に向けて口を開いた長崎湾を囲むすり鉢状の港町で、人口43万人強、年間出生数3300人前後、高齢化率約29%、平成9年に中核市となり、自前の市型保健所を有しています。また、北部・西部で隣接する長与町、時津町、西海市を所管する県の西彼保健所も長崎市内に設置されているため、相互に連携を取りつつ、保健所業務に当

ぶとき、もし明日、相手の見えないうかが突然に始まったとしたら、有効な手立てを考え出し、その実行について社会の合意を得るためには、どれほどの時間が必要だろうかと自問することがあります。下水道が整備された現代、ししとき川はささやかなせせらぎに姿を変え、観光客や市民を楽しませてくれています。現代に連なるこの町の衛生の歴史を目にしなが

ら、ライオン職として人事管理や事業計画、議会説明等に取り組み、基礎自治体のしくみを学ばせていただきます。とりわけ人事・予算・決算等の取り扱い、合意・同意の確認過程等は、臨床にとどまっています。知る機会がなかったと思われ、かつ自治体ごとの違いも小さくないことを知り、とても

顔の見える関係

長崎市に入庁後にはご配慮の下に、まず慣れ親しんだ母子保健、その後は成人保健の担当課長をおのの3年受けもちました。スタッフに手取り足取り助けをもらいながら、ライン職として人事管理や事業計画、議会説明等に取り組み、基礎自治体のしくみを学ばせていただきます。とりわけ人事・予算・決算等の取り扱い、合意・同意の確認過程等は、臨床にとどまっています。知る機会がなかったと思われ、かつ自治体ごとの違いも小さくないことを知り、とても

たっています。

長崎の地は西の果てながら公衆衛生学とは浅からぬ縁があり、「hygiene」の語を「衛生」と訳出されたと伝えられる初代衛生局長の長與専齋先生は、県の玄関口である長崎空港をもつ県央大村市のご出身です。このたびの寄稿のご紹介をいただいた県央保健所長に感謝申し上げます。

室町のころまでごく小さかった長崎の町は、1570年にポルトガル船貿易港の役目を引き継いだことを契機に、急速な国際化と人口爆発を生みました。両岸を斜面地に挟まれた湾は最深部45mの良港として対外貿易で栄え、湾内に突き出た半島南端の岬にサン・パウロ教会(現長崎県庁)、半島の中ほどの尾根にはサント・ドミngo教会(現長崎市役所本館)やサン・フランシスコ教会(現市役所別館・保健所)等数々の教

興味深く感じました。畑違いから飛び込んできた男を、根気強く導いてくれたスタッフに感謝しています。また、三師会を始めとする各団体や大病院からは、現在もさまざまなお助力・ご助言をいただいております。ここに謝意を表します。

昨年4月に所長職のバトンをお預かりして以降、熊本震災支援に始まり、6月には長崎市内で斜面地の住宅が崩落するほどの集中豪雨が発生、その他感染症・食中毒領域においても、結核はもろんのこと、ノロ、ロタ、カンピロバクター、O157、レジオネラ、SFTSや、高齢者施設でのhMPV集団感染、 Dengue熱やサルモネラ、クドアの輸入例等々、次々起こる出来事にスタッフとともに対応するうち、目くるめくように時が過ぎ、あつという間に今日が来たというのが正直なところです。それぞれの場面で、全国の保健所の先生方やスタッフを始め、多くの方々へ相談申し上げ、お力添えを頂戴して解法にたどり着くことができました。導いてくださった皆さまに誌面をお借りして、改め

長崎市民健康部理事
兼 保健所長
本村 克明

平成3年長崎大学卒業。小児科専門医、博士(医学)。UCLA WLA-VA Med. Ctr.、平戸市民病院、日赤長崎原爆病院、長崎大学小児科(講師)、同医局長を経て22年長崎市入庁、28年4月より現職。

会が建てられました。出島は、禁教令後に岬に置かれた長崎奉行所の南側の磯に1634年に造られた4000坪ほどの人工島で、1641年にオランダ商館が置かれ、200年以上にわたり交易の拠点となりました。町の繁栄とともに、半島の東側の浜や入り江は次々と埋め立てが進み、中島川等の水運路には眼鏡橋を始めとする数多くの石橋が架けられて一大商業地に成長しました。町内には華人も多く住まい、この新開地に魅力を感じた和人と、華人、蘭人が折り合いながら仲よく住まう「和華蘭」の文化が育まれました。その一方で、鎖国政策下の他の町より一足早く、国際感染症の洗礼を受ける町ともなりました。

先人の衛生対策に学ぶ

市内には、この町の「衛生」を守ってお礼申し上げます。年を重ねるごとに、逆にご相談を受けるようにもなり、判断に難渋する場面もある一方、人と人とのつながりに助けられる機会もまた増えており、心から感謝しています。

未来に向けて

「自由に語ってよい」という本稿の企画趣旨に甘えるうち、個人の意見を述べることなく誌面を費やしてしまい、申し訳ありません。寄稿のお話をいただいた時点では、「保健衛生サービスの時間/空間的公平性確保」「利益相反」「基礎自治体間連携(広域化促進等)」「国家間連携(輸入感染症等)」「観光立国と防疫」「セカンドステージとしての行政医のすすめ」等を課題候補と考えたものの、まとめきれず散漫な文章となってしまうました。課題と感じていることは整理したうえで、将来何らかの形でお伝えしたいと考えています。

末文までお読みいただきありがとうございます。西方長崎の地に、こうした男がいることをご記憶いただき、何かの際にはご連絡いただければ幸いです。